

カケラを並べて1つに 米作家リチャード・タトル個展

[文化往来](#)[フォローする](#)

2025年5月8日 5:00 [会員限定記事]

保存



「十七」(2024年)

ニューヨークを拠点に、抽象的な作品で知られるリチャード・タトルの個展「San, Shi, Go」が小山登美夫ギャラリー京橋（東京・中央）で開催中だ。都内での個展は7年ぶりとなる。西田幾多郎の哲学に関心を持つというタトルは、同じ数字でありながら「1」と「一」というように文化によって書き方が違うことに興味を持ち、「2」つのものがあるとその差が強調されることに疑問を持つ。世界共通の「1」が可能なのか、ものの共通点に目を向けられないのか。分断が深まっている現代で、木材の端材などのカケラで制作した作品を介して問いかける。

「今なら世界にどうやって『1』を書くかを聞ける」。そう話すタトルは、東洋と西洋をつなげられるものを探していたという哲学者の西田幾多郎を慕う。そしてたどり着いた起点としての数字。中でも大事という「1」は、日本語では「一」と書く。縦の線と横の線という違いがあるが、「誰にとっても機能する『1』を作る」。そして「例

えば私とあなたがいて、2人だけコミュニケーションでつながると『1』になる」という。



「数」(2024年)

展覧会では数字に関連するタイトルがつけられた作品が並ぶ。木材の破片やビニール、くぎなどを素材にした壁にかかった小さな作品だ。始まりの「数」という作品は、「1」と「一」が含まれるように見える黒い木材がある。その後ろには傾きを変えて配置された木材によってさまざまな「1」を含み、タトルの言葉通り、あらゆる「1」を表しているかのようだ。



「十」(2024年)

「十」という作品は、オレンジ色の四角と黒の角材が組み合わさっている。どちらも枠がある四角い形で、スプレーのペンキによって斜めの線が描かれている。共通点が見いだせる一方で、全体としても1つの塊になっている。なんてことはない素材を使った作品だが、世界をよりよい場所にするための実験のようだ。

(鴻知佳子)

 [「日経文化」のX \(旧Twitter\) アカウントをチェック](#)

春割ですべての記事が読み放題
有料会員が2カ月無料

春割で無料体験する

有料会員限定

キーワード登録であなたの
**重要なニュースを
ハイライト**



日経電子版 紙面ビューアー

[詳しく見る](#)

保存

